昭和54年８月１日（第３種郵便物承認）令和３年２月23日発行（毎週火曜日）　ＡＪＵ通巻第14097号

私たちは、自閉症という障害をもつ人たちが、彼らなりに社会の一員として自主自立をめざし、豊かな人生を生き抜くよう共に道を拓いていくことを目的としています。

ＡＪＵ 檜の里

令和３年２月23日 発行 ／ 第103号

発行人 ＡＪＵ
東海身体障害者団体定期刊行物協会
名古屋市中区丸之内３－６－43 みこころセンター4F

編　集 社会福祉法人 檜の里
〒510-1326　三重県三重郡菰野町杉谷 1573
電話（059）394 － 1595
編集責任者　山田　勉
購読料　１部 100 円
（会員の購読料は会費に含まれています）

希望がもてる 未来にむけて

おめかしをして初詣

年賀状の写真

けっこうなお手前

「コロナに負けるな！」

ワークセンターひのき　センター長　**西　野　　公**

昨年は、新型コロナウイルス感染症予防対策に追われた一年でした。定期的な検温の実施、手指消毒、マスクの着用、密を避けるなど、今は当たり前のことのように行なっています。

県内の感染状況を見ながら、新しい生活様式を取り入れた活動を考え、実施してきましたが、「制限ばかりでできないことだらけ」という印象を拭い切ることはできません。

そのような中でも、様々なことを前向きに実践している利用者、職員に励まされている毎日です。

『ワークセンターひのき』では、在宅通所者とグループホームで生活する利用者の作業や活動、生活空間を分けることにしました。支援員を悩ませたのは、お世話になっている地域の会社からいただいた受注製品をきちんと期日までに納めることができるかどうか、ということでした。受注量を減らす交渉をした方が良いのではないか、そういう意見もありました。

しかし、多くの障害福祉サービス事業所で受注作業が減り、利用者の工賃が支払えない、という現状があることを考えると、そんなことを言える状況ではありません。

『ひのき作業所』では、在宅通所の利用者の方々だけで、これまで通りに受注している製品を納められるように、作業の設定を組み替えました。徐々にペースが上がり、一か月もしないうちに、予定の作業量を終えることができるようになりました。

「箱折りは難しい」と支援員に評価されていた利用者も戦力として頑張ってくれました。キョロキョロして、作業に集中していないように見える方も、手を止めずに折っています。チラッチラッと材料を見ながら、飛ばした工程にも気付いて折りなおし、丁寧にやろうとする姿が見られます。最後に、腰を入れて箱の端をはめ込む姿に、私は「凄い」と思わざるを得ませんでした。

でも、作業場にいる支援員は「これぐらいのことは当たり前」と、半年前には思いもよらない言葉が返ってきました。

家庭でも、予防対策のためにいろいろな工夫をされています。休日のお出かけは、なるべく人混みを避けたドライブや公園を散歩したり、親子でハイキングをされたりしています。お父さんとジョギングをすることが休日の日課になった利用者もいます。

グループホームでは、少しでも現状を理解してもらうために、三重県知事のメッセージや感染症予防対策のポスターを見ながら、気を付けることを話してきました。「三重県の知事さんが皆さんに協力してほしいと言っています」支援員からの言葉よりも強烈な印象が残ります。

就労している利用者の中には、作業量が安定せず、急に休みになる日があるかと思えば、仕事量が短期間に集中して残業が増えるなど、安定しないことが続きました。「コロナだから仕方がない」とイライラすることもなく、頑張っています。

グループホームの利用者は帰省することができず、全員、それぞれのホームで正月を迎えました。年末には、遠く離れた家族とリモート面会をすることができました。テレビのように、画面に映るご両親やご兄弟を見て、一瞬、びっくりしたような様子でしたが、とても穏やかに、嬉しそうにしていました。

また、ご家族に年賀状を送りました。個性あふれた版画やホームの仲間と仲良く生活している姿を写真に撮って、メッセージを添えました。ご家族の方々にも、元気で過ごしていると安心してもらうことができたことと思います。

年始には各ホームで書き初めをしました。「コロナに負けるな」の文字からは利用者の方々の願いと活力を感じます。

ある通所の保護者の方が連絡帳にコロナ禍の中「成長したところもいっぱいあります」とありました。私たちは、利用者、ご家族の方にそう感じていただけるようにコロナと向き合いながら、これからも支援していきたいと思います。

コロナ禍の状況が治ったとしても、以前のように何もかもが元に戻ることはないと思います。今年は身についた良い習慣を継続し、日中活動の編成や設定、プログラムなど、前に進めていく一年にしたいと思います。

学園だより

この年末年始の直後から新型コロナウイルス感染者数は激増し、再び緊急事態宣言が発せられるに至ったことは皆さんご存じのとおりです。

私たちの自閉症総合援助センターあさけ学園では、恒例の冬期家庭帰省はもちろん、外出や面会等、入所施設やグループホームの利用者と家族の直接的な交流をストップし、他の感染症を含めた予防対策の強化を図ってきました。そして、令和三年は学園が開設してから四十年間で初めて、利用者が全員揃って迎える新年となりました。

このような状況のもと、学園やホームで過ごす年末年始の利用者の様子について、紙面のスナップ写真でお伝えしたいと思います。

小さいけれども鏡餅を飾り、暮れの三十一日には雪が降り積もり、食事に年越しそば、元旦にはお正月盛り、三が日までお雑煮や赤飯がメニューに並ぶ中、朝ゆっくりと起きて、年賀状の作成や書き初め、お茶会、テレビのお正月特番、密を避けて近所の神社へ初詣など、仲間たちと一緒のお正月の雰囲気を味わってもらえたように感じられるところです。

それでもやはり、人それぞれに表現の仕方は違うものの、今後の外泊等の予定の確認や要求、またはいつから作業が始まるのかという質問は、彼らの日常でよく見かける行動でした。とりわけ、ショートステイしていた方の送迎に訪れた保護者が目に入ると、余計に大きな反応の出た利用者がいるかと思うと、ずっと普段通りのメンバーと変わらずに過ごしたためか、これまでの家庭帰省時よりも落ち着いていたように見える人もいます。

冬期休みの生活

とりわけ、個々の利用者においては、家庭帰省がまったくないことによって、これまで観られなかった側面を知ることもできました。例えば、カレンダーの取り換えを急いで、三十一日のうちに何度もゴミ箱に捨てようとした人、外出や買い物に行きたいために自分の歯ブラシを折ってしまう人、土曜日や日曜日、祝日でない平日は作業なので、冬休みの平日は朝起きると作業の服装を整えようとする人など、改めて丁寧な説明を要する場面も散見されたので、数例を紹介しておきます。

いずれにしても、早く暖かな春の日が訪れ、安心して外に出て行けるよう願うばかりです。

（施設長　近藤　裕彦）

こんにちは

三重県自閉症協会
藤井滋子

このコーナは、インタビュー形式ですが、今回は社会福祉法人檜の里評議員の藤井滋子さんに投稿いただきました。【編集部】

今年度より評議員をさせていただいております。社会的な地位も専門的な知識もない自分に評議員が務まるのか、自信はありませんでしたが、法人の運営や福祉のことなど、勉強するつもりでお引き受けしました。

知的障害と自閉症を持つ次男は現在二十四歳です。まだ課題はたくさんありますが、まぁまぁ順調な毎日だと思います。子育て真最中の頃を振り返ると大変なこともいっぱいありましたが、次男からたくさんの幸せをもらいました。「この子が自分の子でよかった」そう共感してくれるお母さんをひとりでも増やしたいと思い、三重県自閉症協会のペアレントメンターとして活動しています。

趣味は登山で、妊娠・出産・育児中のブランクはあるものの登山歴三十五年、多いときには月十回以上入山しています。次男も幼稚園の頃から伴い、登山会の仲間とともに山を楽しませてもらっています。できるかぎり長く親子で登山を楽しみたいので、心身ともに健康でいられるよう努めています。

皆さま、どうぞよろしくお願いします。

「鈴鹿シティマラソンONLINE2020」

青葉台ホームⅢの青木彦さんが二〇一五年から参加している鈴鹿シティマラソンは、今回オンラインマラソンの形式で開催され、サーキットコース5.6㎞の部に参加しました。専用スマートフォンアプリを利用して十二月十二日（土）地元菰野町を走りました。

当日西野センター長が飛び入り参加。森の中を走ったり、朝明川の潜水橋を渡ったりアドベンチャー要素の高い設定だったので、初めて走るコースも安心して走ることが出来ました。

例年に比べて練習量が少なく、完走できるか不安でしたが、四十分三十七秒の好タイムで完走、六百七十八人中四百九十七位でした。

コロナに立ち向かう努力が好タイムに繋がり、仲間からの応援がいつもより熱く心に響いたのではないでしょうか。

彦君、よく頑張りました！

（支援員　山下　茂）

支援と連帯の輪・和 ⑨1

利用者の健康問題 ㊵

あさけ診療所所長　**小西眞行**

新年がコロナ第三波の中で始まりました。学園も診療所も旧年にひき続き細心の注意を払いながら業務をスタートさせています。

ところで、この冬は利用者の風邪ひきも目立たず、恐れているインフルエンザも今のところ全国的にも問題になっていません。コロナ対策で、手洗いやマスクの着用、三蜜をさけることが功を奏しているのか。それともこの三種のウイルスの勢力争いの結果なのか。医療者としては興味のある所です。

このコロナ禍でも診療の内容はいつも通りです。例えば、子供の発達を私は指を三本たてお母さんに説明します。一本目は体格で、身長と体重を計ります。二本目は知能レベルで、各種の心理検査があります。三本目が社会性の発達です。

社会性という言葉は難しいので次のように説明します。子供が学校に行く目的は二つ。一つはもちろん学習（読み書き算数など）。もう一つが、社会性の獲得です。すなわち他児と関わりコミュニケーションをとる事、給食を皆で食べること、トイレの利用、係り活動をする事など、学習以外の学校生活全般です。感情のコントロールなども含まれます。（注）

自閉症ではこの社会性の獲得が生れつき大きく損なわれています。したがって幼児期の早期から、一つ一つ適切な行動や態度がとれるように周りが働きかけねばなりません。定型発達児の場合も同じですが、彼らは親や先生の要求に応じ、他児に合わせようとします。また見よう見まねでエチケットや社会のルールをいつの間にか身につけます。しかし自閉症の子達はこうはいかないのです。

これにつけ加えて「三つのダメ」を分からせること。これが幼児期から大事だと十亀先生は強調していました。一つ目は危険なことで道路への飛び出しや火の扱い。二つ目は乱暴や暴言。三つ目が恥ずかしいこと、みっともないことです。

これには父親の協力が力になります。父親の持つ社会性です。優しい身近な母親はどうしても舐められることが多いのです。このダメな事は、した後で叱ってもまた同じことをくり返します。「自閉症の脳は反省機能が働かないのですよ。だからダメな事のスイッチが入る前に言い聞かせてください」と助言します。行動化せず我慢できれば笑顔でほめます。根気よくこれをくり返す事で初めて「ダメ」が身に付きます。

（注）教科の学習能力は認知能力、他児と関わったり学校生活上の諸課題をこなす事（社会性）は非認知能力ともいいます。

この記事㊵が皆さまのお手元に届くころには、コロナの第三波が終息に向かっていますように。

編集後記

令和二年は新型コロナ感染拡大を受け、人が集まることや、自由に移動することなど、今までであれば当たり前であった活動ができなくなるという、過去に経験したことのない世界になりました。

学園の早めの感染予防対策と日常の手厚い取り組みに感謝しつつも、行事や帰省等は中止になっています。そのような中、今号はページ数を減らしてお届けしました。

人と会うことがままならない今、あらためて紙面で情報を伝えられることの大切さを実感しています。

日々の生活の制限にも慣れてきたと思っていましたが、時々疲れてしまいます。小さな楽しみを積み重ねながら、コロナが収束した後の活動に向かう元気と勇気を維持しながら、今年は良い年でありますようにと祈っています。

（保護者　伊藤貴宮子）